

ととり通信 31号

民族教育の未来をともにつくるネットワーク愛知
ととりの会



ととりの会公式LINE
ぜひご登録ください！



内容

- ・ 2025年度総会・基調講演まとめ
- ・ 映画「ソリヨモヨラ」上映会感想
- ・ -学校紹介動画作成に携わって-
- ・ 交換授業の感想
- ・ 通学バスの同乗支援について
- ・ ほのぼの便り

2026年1月発行

2025年度総会・基調講演まとめ

今回の総会でご講演いただいたのはジャーナリストの中村一成さんです。全国各地で行われた無償化裁判闘争の取材とその記事の執筆をしてきた方です。『月刊イオ』で2017年から連載されているルポ「在日朝鮮人を見つめて」をまとめた『今日に抗う一過ぎ去らぬ人々』（2024年9月出版）出版記念講演としてお話をさせていただきました。

本書では、私たち「ととりの会」が長年闘ってきた裁判闘争の記録はもちろん、『京都朝鮮学校襲撃事件』や『ウトロ放火事件』、『ネットヘイト訴訟』に加え、『入管法改悪反対運動』や『パレスチナ解放闘争』など幅広いテーマが扱われています。世界各地で今なお続く差別や抑圧、そしてそれらを生み出し続ける国家や社会制度に抗う人々の「歩み」や「生き様」が描かれています。

講演の冒頭で一成さんは、現在も続いているイスラエルによるガザ地区での虐殺こそ、旧帝国主義国家が生み出す「人権」「正義」「法のもとの平等」といったダブルスタンダードがもたらす暴力そのものであり、私たちが抗うべき「今日」なのではないかと提起されました。実際、在日朝鮮人の方々や私たち支援者が「日本社会」から絶えずさらされている攻撃――差別的な政策、ヘイトスピーチ、ヘイト記事・投稿など――も、まさに同じ原理で生じている暴力であり、抗うべき「今日」だと言えます。

2018年4月、90歳で亡くなった朴鐘鳴さんも、生涯のほとんどを「今日」に抗うことに捧げた方です。1928年に光州市で生まれ、5歳の幼さで日本に渡ったものの、そこで待ち受けていたのは耐え難い被差別体験でした。当時通っていた学校の教師からは民族名を辱められ、体罰を受ける日も少なくなかったといいます。暗い青年期を過ごすなか、とある在日朝鮮人青年との出会いが転機となり、朴鐘鳴さんは運動家の道を歩むようになります。GHQと日本政府による朝鮮学校閉鎖に対し体を張って闘い、政治犯として投獄され、拷問も経験されました。それでも「次代に自分と同じ思いをさせたくない」との思いから、釈放後も足を止めることなく、民族教育の権利のための闘争に尽力されました。一成さんは、その取材を通じて朴鐘鳴さんの「生き様」から大きな影響を受けたと語ります。

標的となるだけでなく、自己実現さえおぼつかない現実、そしてその不正を黙認している構造にも気づいていくといいます。そのような子どもたちを「暴力」「憎悪」「諦め」「順応」から遠ざけるため、非暴力的な「芸術による自己実現」を目指されていました。の周囲にある立て看板にサインを残されました。「アル＝ソムード」——「そこに踏み止まり、不退転で闘う」という意味だそうです。また、一成さんは、朝鮮人と日本人の間に生まれた自身に向けた言葉として、ジュリアーノさんの次の言葉を紹介してくれました。

「僕はハーフじゃない。100%ユダヤ人で、100%パレスチナ人なんだよ。」双方を生き、引き受ける強固な意志と覚悟を示し、「ダブル」という意味を体現したジュリアーノさんは、その数年後、何者かに命を奪われてしまいました。

一成さんは、暴力に「抗う」ためには、「被害者」とされる人々と直接会い、その言葉を聞くことを大切にしていると語ります。彼らの「譲れない一線」に触れ、その生き方から学び、その記録としての「言葉」が人をつなぎ、そのなかで自分自身の言葉を紡ぐことで、「誰か」の帰る場所、道標をつくっていく。その営みには、頽廃の止めどない世界の中で「今とは違う未来」「生きるに値する世界」を求める人々の、「新しい普遍性」（徐京植）へと向かう可能性が詰まっているといいます。

来場された聴講者に多くの感動と重要な問いを投げかけてくださった貴重な講演会でした。最後に、本書より印象的な一節を抜粋いたします。

私、私たちは問われているのだ。先人から、歴史から、そして私たちは自身の人生から。日々惹起する出来事を前に、「恥じぬ選択」を重ねること。その積み重ねで私たちは、過去を変えられる。もちろん起きたことは変えられない。変えられるのはその意味付けだ。裁判所での怒りと屈辱も、署名用紙に「死ぬ」と書かれ、差し出したチラシを叩き落とされた哀しみも、常に暴力の標的となったチマチョゴリの制服姿の生徒の恐怖も、右翼学生に撲殺された横浜朝高生の無念も、一九四八年、大阪府庁前の土壌で放水に吹き飛ばされ、警棒で滅多撃ちにされた先人の憤怒も、そこで官憲に射殺された少年の苦しみも…。

これらの痛みの記憶に応答し、「生きるに値する世界」を希求しながら闘い続けること。そのとき、痛みに満ちたかつての出来事の一つひとつが、そんな新たな世界を切り拓く道へと繋がる。遺された者に出来るのはそれしかない、いまを生きる私たちにはその義務がある。

（「私、私たちは問われているー高校無償化裁判〔原告と支援者たち〕」本書83Pより抜粋）

映画「ソリヨモヨラ(声よ集まれ)」上映会

2025年6月5日(木)に行われた映画上映会の感想を紹介します。

全体が朝鮮学校に関わり、応援する人たちの語りで構成されていることが、面白く感じとてもよかった。それぞれの人たちが自分の思いを率直に話す言葉を、ナレーションが最小限であることで、バイアスがかからず受け止め考えることができた。朝鮮学校について自分は何も知らないということや、国民を含めた日本という国がいかに傲慢で怠慢かということに恥ずかしく思った。



序盤から中盤にかけて、在日朝鮮人が経験した困難や苦しみ、そして現在も続く根強い差別や暴力がありありと描写されていた。その残酷さは、画面越しにも十二分に伝わり、個人、社会、歴史、そして自分自身に対する強い憤りと絶望感を与えるものだった。一方、終盤にかけては、逆境の中で前向きに活動する在日朝鮮人及び日本人等が、笑顔とともに映し出されていた。

学校や地域レベルで活動を継続し、草の根運動から差別を減らし、誰もが住みやすい地域づくりに取り組む姿は、見ている私にも希望を与えてくれた。そして、映画全体を通じた感情の起伏が、終盤の映像を、そして今を生きる在日朝鮮人の勇姿をより輝かせてくれた。

他にも、「不当な差別に慣れるのではなく、その差別を自覚しそれらと闘い続ける強い力を感しました。」「朝鮮学校の教員としてウリハッキョの学生たちの姿をもっと色々な人に知っていただけないかと考え、輪を広めていくことの大切さを感じました。」など多くの感想が集まりました。

～「5分で分かる朝鮮学校」 映像制作に携わって～

ととりの会事務局 朴 鐘勲

ととりの会では、朝鮮学校に関して広く周知すること、理解を深めてもらうことを目的とした短編動画制作プロジェクトを立ち上げました。制作作業にあたり、私には不安がありました。

それは、自分が朝鮮学校の卒業生でありながら、朝鮮学校について「内部からの視点」でしか見てきてない事でした。

もちろん朝鮮学校で民族教育を受け、歴史について学ぶ中で客観的な視点からの理解も深めてはきましたが、それを表現する言葉や立場は朝鮮学校に通った在日朝鮮人としてのものです。

なので、映像や文章として日本の方々にも理解していただける内容で制作するとなった場合に、うまく表現出来るだろうかとの思いがあったのです。

ですが、当初の不安は杞憂でした。実際に他のととりの会のメンバーと制作を進める過程で、写真等の資料を集めたり、多くの方の助けをいただきながら原稿をまとめていくことは、自身の中で朝鮮学校・民族教育がいかに大切なものであるかを振り返る貴重な時間となりました。

全国的な民族教育の歴史はもちろん、特に愛知での民族教育の歴史を資料で振り返りながら、自分がこれまで出会ってきた同胞や、名前だけ聞いた事がある同胞、顔だけ知っている同胞、そして名前も顔も知らない同胞達の隠れた努力があり、今日まで民族教育の歴史が紡がれてきた事を感じました。

そこには共に歩んできた日本の方々もいたはずです。

今回の動画制作を経て、再び深く刻むこととなった民族教育への誇りを抱いて、これからも日本の友人たちと膝を交え、話を交わし、時間はかかったとしても明るい未来に向かって共に歩んでいければと思います。

動画制作の過程がまさにそうであった様に、互いを尊重しながら、理解を深め合いながらー。

作成した動画は公開・交換授業で多くの方にご覧いただきました。
今後も様々な場面で活用していきますので、ぜひご覧ください！

交換授業授業を行いました！

2025年11月2日(日)に愛知朝鮮中高級学校とともに行った「公開授業・交換授業」
参加者と実際に授業を受けた学生に感想を伺いました。

●今回、交換授業で朝鮮学校の講義を受ける機会を得たことは、私にとって貴重な体験でした。普段、大学では日本社会の中での多文化共生や民族教育について学ぶことはあっても、実際の教育現場に足を運ぶ機会はありませんでした。そのため、教室で生徒たちの表情や授業の雰囲気を感じ取ることができたのは、大きな学びでした。授業では、言語や文化を大切にしながら学ぶ姿勢がとても印象的で、朝鮮語が自然に使われており、同時に日本語も流暢に話す生徒たちを見て、二つの文化の間で生きることの力強さを感じました。一方で、社会の中で彼らが直面するであろう偏見や課題を考えると、今まで勉強したと思っていたことが、実際には無知だったと反省する機会にもなりました。この授業を通して、文化や民族の違いを特別なこととすることなく、同じ社会を生きる一員として理解し合う姿勢が大切だと改めて感じました。今後は、教科書の知識だけでなく、実際に現場と関わりながら学ぶことを大切にしていきたいです。

●今回の公開、交換授業では今まで自分のイメージや又聞きでしかなかった在日朝鮮人に対する歴史や現状を本人から詳細に聞き、当事者たちがどのように考えてきたのか実際に聞けて大きな学びにつながった。また、現在においても高校無償化など多くの問題が残っているのでそれらに関する関心もより高めていきたい。

今回私は3度目の参加となった交換授業ですがたくさんの学びがあった一日でした。

私は大同大学の原科浩先生の授業を受けました。内容は地動説についてで、ただ地動説が歴史の中で証明した過程を学ぶだけでなく、最近のアニメの話が出てきたり、日常生活からみる地球の運動についてなど様々な角度から地動説について知ることができてとても面白かったです。

その後、トトリの会の皆さんと「トプロ祭り」に参加し交流をしました。私はそこでゼミの一環で参加していた大学生と話しながら一つ感じたことがあります。それはまだまだ在日朝鮮人の存在について知らない人がたくさんいるんだという事です。大学生の方々と会話をしながら私が日本で生まれ育ち、異国の地でウリハッキョに通い、自分の国の言葉を学ぶ中で民族性を守っているという話をした時も、あまりピンと来ていなかったように感じました。今回交換授業に参加しながら楽しい時間を過ごしたのと同時に、自分たちが在日朝鮮人の存在について知ってもらう機会をもっと作りたい、多くの方に知ってもらう必要があると改めて思い、私も伝える活動に積極的に参加していこうと感じることができた一日でした。

学生 （高3・女子生徒）



通学バスの同乗支援について

2025年6月より開始した名古屋朝鮮初級学校/付属幼稚園、
東春朝鮮初級学校の通学バスでの同乗支援。

「バスの車掌さん」の役割を担っている山脇さんにお話を聞きました。

朝鮮学校のバスに乗る

山脇佳(ととりの会事務次長)

通学バスには、いつも子どもたちの声が響いている。

2025年6月から、私は名古屋朝鮮初級学校/付属幼稚園の通学バスに同乗している。普段、この役割を担っているのは先生たちだ。

バスは往復で3時間程度、それ以上かかる場合もある。

授業の準備も、教材作りも、その時間は止まる。

そこで、先生たちの負担を少しでも軽減しようと、ととりの会のメンバーが交代で同乗することになった。

週に1回程度、東春朝鮮初級学校では山本かほりさん、三浦綾希子さんと私は名古屋の帰りのバスに乗っている。バスに乗るということは、先生の多忙解消につながる。しかし、それ以上に私にとって大切な経験になっている。それは子どもたちの「生」に触れるという体験だ。子どもたちが何に興味を持っていて、学校生活のどの瞬間を覚えていて、休みの日に何をしようとしているのか、バスの時間を通して、かれらの経験や生活を知る機会になる。わずかな移動時間に、かれらの個性や生活があふれだす。

日本の多くの人々が、朝鮮学校に通う子どもたちの生活や声に触れることがないのが現実だ。私自身、大学院で朝鮮学校の問題に触れるまで、かれらの生活を何も知らなかった。遅すぎる気づきである。だからこそ思う、社会がまず知るべきなのは、朝鮮学校に通う子どもたちの一人一人の生きる様ではないだろうか。バスには、家に帰ることを楽しみにしている子もいれば、疲れ切って寝ている子、運転手のアボジとクイズやゲームをしている子、ちょっかいをかけてくる子など、いろんな子どもがいる。私たちは、バスに乗り、かれらが大事にしたいものを一緒に守るため、できることを考え続ける。



東春朝鮮初級学校にて



名古屋朝鮮初級学校にて

ほのぼの便り～ととりの会事務局員より～

皆さま、アニョンハシンミカ。

昨年(2019)の10月より、ととりの会の事務局員となりました。

山田姫奈詩(やまだひなた)と申します。

私は現在、大学4年生で社会福祉を専攻しており、最近は多文化共生や民族教育の分野に関心を持っております。

私は、大学1年生の時に行われた、留学同東海の方たちとの交流会をきっかけに、在日朝鮮人という人たちの存在について知りました。その後、参加した京都府のウトロ地区へのフィールドワークで放火事件の現場へ行き、かたちとなった差別というものを初めて目の当たりにしました。そこから、朝鮮と日本の歴史や関係性から生まれてしまう差別について問題意識を持つようになり、名古屋コリア文化研究会という在日朝鮮人の学生と日本人の学生と一緒に活動するインカレサークルに所属し、活動をしていくようになりました。そして、朝鮮と日本の様々な問題について学んでいく中で、朝鮮高級学校が高校無償化制度から除外されていることを知り、日本が行う排外的な政策に疑問を抱くようになりました。そんな中、ととりの会の総会に参加したことをきっかけに、私も朝鮮学校の民族教育が守られていくために少しでも活動したいと思い、ととりの会の事務局に入らせていただきました。

事務局の一人として活動させていただく中で、朝鮮学校に行く機会が多くなりました。朝鮮学校へ行くと、すれ違う全ての生徒や先生方が私に笑顔で挨拶してくれることやフレンドリーに話してくれることがとても嬉しく、あたたかく歓迎されている気持ちになり朝鮮学校へ行くことが楽しみになっています。そのため、朝鮮学校の民族教育を守っていききたいという思いがより一層強くなっています。

朝鮮学校の先生方とお話する中で、実際の朝鮮学校の現状や課題、時代と共に変化する民族教育などについて知ることができ、活動を行う中で、朝鮮学校に関わる多くの人の声を直接聞くことが大切であると気づかされました。今、何が課題で何が必要とされているのかをしっかりと聞き取り、理解して活動していくことが求められると感じております。

今の日本社会は、朝鮮学校の民族教育を守る体制が整っておらず、差別的な政策ばかりです。しかし、毎年開催される交換授業のような朝鮮の文化に直接触れることができる機会を通して、私は朝鮮の文化のすばらしさを知ることができ、微力ではあると思いますが、朝鮮学校の民族教育を守るために闘っていきます。「一人はみんなのためにみんなは一人のために」と心に刻んで、まだまだ未熟ではありますが、これからもととりの会の事務局の一人として活動してまいります。

